

学校行事

旅行・集团宿泊の行事

指定校番号	28020	学級活動	児童会・生徒会活動	学校行事	○	別紙様式
-------	-------	------	-----------	------	---	------

平成 28 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立亀山小学校	校長	宮本 眞弥子	生徒指導主事	長尾 圭一郎
-----	-----------	----	--------	--------	--------

取組事例名 5年生『力を合わせて、全員で（福王寺）遠足をクリアしよう！！』

取組のねらい『キーワード 現状把握 + 一步踏み出す』

第5学年は、学年目標を『5（5分前行動）go（自ら行動する）合（力を合わせる）』と決めて、全ての行事の根底にそれを当てはめながら、様々な活動をクリアしてきた。その中で、5月上旬の「福王寺遠足」では、7月の中旬に行われる野外活動での「男三瓶登山」を意識させ、「全員で登山をクリアするための一歩である」と位置づけた。そのために、それぞれが、去年からの自分を振り返り、あと一歩足りないところを考えた。（現状把握）その後、それをふまえて、この遠足でどう頑張るか、参加の仕方も含めて、一步踏み出すための「チャレンジ遠足」とした。

取組の具体的内容『キーワード 違いを知る + 全員でクリア』

5月上旬の「福王寺遠足」は、7月の中旬に行われる野外活動での「男三瓶登山をクリアするための一歩である」と考え、①自分の力（現状把握）を見つめ直し、②一步踏み出す遠足（チャレンジ）という位置づけとなった。さらに、それらを発表する中で、登ることや登校すらもしんどい児童（仲間）がいることを知り（違いを知る）、③力を合わせて、クラス全員で福王寺遠足をクリアしようということとなった。

取組の課題・創意工夫『キーワード 綿密な事前連携（保護者、ふれあいほか）』

第5学年の中には、教室に入れず、（昨年は「ふれあい教室」すら入れなかったが）「ふれあい教室」で授業を受けている児童もいた。そこで、担任や学年団、生徒指導主事は、その児童も含めて、いかに全員でクリアできるかを当該児童及びその保護者、ふれあいの先生たちと何度も連携を行った。そして、当該児童に様々なプランを提示し、スモールステップで目標をクリアしていきつつ、「本人が何とか自分で頑張る」というよい雰囲気遠足前日を終えることができた。

取組の成果（効果）『キーワード 限界を超える』

ところが「遠足当日」になると、当該児童は、お腹が痛くなり、何度もトイレに行き、「お母さんと行く」と言い出した。しかし、事前にそのような事態も想定しておいたので、母親と作戦通り、当該児童を頑張らせることができ、「しんどい」「はく」を連発しながらもなんとか福王寺登頂を達成することができた。本人曰く、「人生で一番しんどかった。」「限界を5回以上超えた。」と言っていたが、帰りの歩きや母親と会った時には、とてもいい顔をし、達成感に満ちあふれていた。



また、当該児童のがんばりの影響で他の「ふれあい教室」の児童も遠足に参加できるなど、学年団の教員が上手に広報してくれたことで第5学年の他の児童にもよい影響（それぞれの限界を超える）があった。

今後の展開『キーワード 個のがんばり→集団での助け合い』

第5学年の学年団の教員は、厳しく「個でのがんばり」を要求し、それに児童たちもしっかりと応えてきた。そして、次の「野外活動の男三瓶登山」では、それにプラスして、「集団での助け合い」の必要性を説き、学年全体で頑張ることができた。結果的には、全員が山頂達成という訳ではないが、それぞれの目標を何とか達成し、それに対する他の児童の助け合いなども見られるようになってきた。

10月に実施した運動会の集団演技などでもその成果が見られ、学年団としての成長も感じることもできた。



他校へのアドバイス『キーワード 様々な特別活動を仕組む』

小学校の良い所は、様々な行事や活動がたくさんある所だと思う。クラスには、不登校だけでなく、様々な状況の児童が在籍しているが、その様々な児童をその活動のどこで生かすことができるかという視点で見ることができれば、普通の遠足でも、本人にとっては大きな達成感をもつことができると感じる。(実際に、その当該児童は、昨年、観客席からの参加であった運動会にも、児童席で参加し、いくらかの種目と係活動に参加することができた。) また、様々な児童に「できた」という達成感を持たせるために、我々教員は、より積極的に様々な特別活動を仕組んでいくという視点がとても大切であり、そのステップこそがセンスであり、だからこそ、日頃の子どもの見取りや保護者との連携が大切になってくるのではないかと感じる。

校番	50	ホームルーム活動	生徒会活動	学校行事	○	別紙様式
----	----	----------	-------	------	---	------

平成 28 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島県立河内高等学校	校長	西山 光人	生徒指導主事	井上 健二
-----	------------	----	-------	--------	-------

取組事例名 『遠足を通じた仲間づくり』

取組のねらい 『キーワード 協力と自己の責任』

遠足(2年生校外学習)のプログラムに「野外炊さん」と「プロジェクトアドベンチャー(課題解決ゲーム 以下PA)」を取入れ、他を思いやり、助け合う気持ちの大切さを醸成するとともに、自己責任感を育成する。

取組の具体的内容 『キーワード 課題と取組の一致』

本校では、年度初めに各学年がそれぞれ校外学習を実施している。実施場所は、1年生は禅寺、2年生は備北丘陵公園、3年生はしまね海洋館(アクアス)が数年来定着していた。

しかし、2年生の場所は天候に左右されやすく、移動距離や現地での活動内容等に課題があった。そこで3年前に、場所にこだわることなく、天候に左右されずかつ研修内容が生徒の学校生活に生かされるものとする方向で検討した結果、福山青少年自然の家でのプログラムを活用することとなった。

「PA」では、複数人で手をつないだ状態で座り、互いの足先をつけ、いかに立ち上がるかを競う『トラストアップ』やフープを1つ入れて全員で手をつなぎ、全員がフープをくぐり抜けて同じ輪にする『魔法の鏡』など、チームでの協力や話し合いが必要なゲームを行った。生徒は知恵を出し合い、また上手くいかないときはさらに考え、成功したときは大きな歓声が上げていた。

「野外炊さん」ではカレーを作った。薪運び、食器の準備等を班内で分担しながらの作業となった。薪に火をつけることはもちろん、飯盒で米を炊くことが初めての生徒も多く、貴重な体験となった。皆で作ったカレーは屋外で食べることで一層美味しかったようだ。



みんなで相談中



「せーの」



「うまく炊けるかな？」



美味しそうなカレーの出来上がり

取組の課題・創意工夫『キーワード 協同と仲間作り』

本校生徒の学校生活のつまずきには、人間関係のトラブルによるものが決して少なくない。相手の気持ちを読まない、読めないことに加えて表現力の不十分さから人間関係が上手く作れない生徒が多く、これは本校の課題の一つである。校外学習の目的は一言でいうなら『協同』を通しての仲間作りである。PAは互いに課題を解決していこうとする協力の意識がなくしてはできず、野外炊さんも準備・片付けなど、助け合いや自己責任の態度が必要であり、このプログラムは人間関係を作る上で非常に大きな意義があった。

取組の成果（効果）『キーワード 楽しいが基本』

遠足終了後、生徒にPAとカレー作りに分けて感想を書かせた。PAに関しては「協力し合えた」「できて楽しかった」「面白かった」などの肯定的な感想が約68.8%で、カレー作りに関しては「協力して楽しくできた」「火おこしが楽しかった」「なかなかできない体験だった」などの肯定的な感想が83.3%であり、数値的には取組の成果はあったと言える。

今後の展開『キーワード 非日常の経験と仕組むこと』

カレー作りの感想の中に「今度はカレー以外の料理を作ってみたい」というものがあった。これは屋外でのカレー作りを通して、仲間意識や連帯感が生まれたことに対する達成感や充実感の表れであろう。

校内の調理教室を活用して班ごとで何か料理するという活動も考えられる。しかし、「屋外」「薪」「飯盒」などの非日常的な要素に生徒が魅力を感じていることを考慮して、できれば3年間うちにもう一度、いわゆる野外活動を経験させてやりたいと考えている。

PAでは、ファシリテーターの存在が非常に大きい。PAの進行には集団の把握、声かけ、的確な指示など瞬時の判断と対応力が求められる。本校はリーダーシップを取れる生徒が少なく、どちらかと言えば受動的な態度の生徒が多い。しかし、そういう集団だからこそ、協力してできたときの喜びが大きく、発言や自分の考えを出せるチャンスがあり、またそれを引き出すのがファシリテーターであると言える。

社会や生徒の多様化に伴って、教職員には益々生徒対応力が求められる。生徒指導や個別指導に対してはカウンセリングの技法も必要であるし、集団作りではファシリテーターとしての技術も求められる。またその技術の発揮が、リーダーの育成にもつながると思う。

他校へのアドバイス『キーワード 「例年通り」からの脱却』

遠足は、学校から離れる解放感、貸し切りバスでの移動や景勝地での観光など、生徒にとって楽しみな学校行事の一つである。観光の要素は否定しないが、その目的地や内容については、学校の創意や教育的識見を生かして計画立案することが必要である。

従前の本校では「例年通り」で場所が決定されていた。しかし、安易に例年通りとすることは、行事を行事化することになる。候補地の選定や経費等の検討などを新たに行うことは多少の煩わしさがあるが、行事の意義・目的を学校や生徒の課題と照らしわせて常に見直し、進化や改善を伴うものにすべきである。